

デューイの教育学構想と 実験学校におけるアシスタント活動

伊 藤 敦 美

1 研究の目的

デューイ実験学校では、常勤の教員に加えて、アシスタント、大学助言者、保護者、地域社会の人々が教職としてそれぞれの役割を果たしながら活動していた⁽¹⁾。アシスタントのうち、数人は有給で、他には大学から授業料を援助されているような大学院生や、多くの学部学生がアシスタントとして活動していた⁽²⁾。本研究では、シカゴ大学教育学科におけるデューイの教育学構想の観点から、デューイが実験学校にアシスタント制度を導入した意図及びその意義について検討することを目的とする。

まず、デューイの教育学構想及びシカゴ大学教育学科とデューイ実験学校の構想について整理し、次に、デューイ実験学校におけるシカゴ大学学生のアシスタントの活動について考察する。

本稿は、1 研究の目的、2 デューイによる実験学校とシカゴ大学教育学科の構想、3 シカゴ大学時代のデューイの教育学構想の背景、4 シカゴ大学時代のデューイの教育学構想、5 シカゴ大学教育学科の変遷とデューイ実験学校、6 デューイ実験学校におけるシカゴ大学学生アシスタントの役割と意義、7 デューイ実験学校でアシスタントを行ったシカゴ大学学生の進路、8 研究のまとめから構成される。

2 デューイによる実験学校とシカゴ大学教育学科の構想

デューイは、実験学校について「当小学校は、開設当初から2つの側面を持っている。すなわち、その1つは、この学校にあずけられている子どもたちの教育をする、という明白な側面であり、他の一面は、シカゴ大学との関係性を持っている、ということである。というのは、本校が大学の管理のもとにおかれており、しかも大学の教育学研究の一端を担っているからである」と説明している⁽³⁾。つまり、デューイは、実験学校は①子どもたちの教育、②大学の教育学研究の一端を担うという2つの役割を持つ学校であると位置づけている。

デューイ実験学校は、デューイが自らの教育理論をそこで実地に検証す

るために設立した学校であると理解されることがある。しかしながら、彼は個人的な欲求からこの「実験学校」を設立したわけではない。デューイはいろいろな機会をとらえて「実験学校」の必要性や設立の意義を強調しているが、その際に彼は、常に大学における教育学研究の確立と結びつけて同校の必要性を論じている⁽⁴⁾。このことから、デューイは、彼の実験学校について、②の大学の教育学的研究を担う役割、つまり、シカゴ大学教育学科が教育学研究機関となりうるための実験室となることを常に意識していたといえる。

シカゴ大学教育学科についてデューイは、「既に教育に関する経験を持った教員たちを学生として受け入れている」⁽⁵⁾、「学位取得のための教育学研究に組織的かつ調和的な機会を用意することは、当シカゴ大学で始めたばかりのものを除いて、全く見あたらない」⁽⁶⁾、「この事実は、わが国における全教育制度の土台を組織、指導、監督する責任を担っている初等及び中等教育の全教員が、科学的訓練の欠如から、偶然、気まぐれ、惰性、あるいは無益な実験のおもむくままに、不当にも放置されていることを意味することにもなる」⁽⁷⁾ので、シカゴ大学に「教育学研究のための課題を提起し、あわせてそのための機会を設けたのである。それは、小学校教員の育成を図る養成所や師範学校と張り合うものでもなければ、まして、教育の理論と歴史を正確に講ずることを他大学と張り合うものでもない。それは、当研究科のクラスに高度な授業と指導を施すことにに関して、当大学の持てる諸力を組織化しようとするものである」と述べている⁽⁸⁾。

さらに、シカゴ大学教育学科とデューイ実験学校について、「理論的な指導と結びつけて、公開授業、観察、実験を行うことのできる学校の経営は、この計画全体の中核である。これなくしては、如何なる教育学科も、教育界の信頼をかちえてこれを掌握・指導することなどはできようはずもなく、また、諸原理を提示するだけで、これらを実際に公開・吟味する手だてを欠いたのでは、教育専門家の注意を引きつけるまでにはならないであろう。さらに、これなくしては、理論的な研究そのものも道化とペテンの性質を帯びることになる」⁽⁹⁾と述べている。

デューイによる実験学校とシカゴ大学教育学科の構想の背景には、教育学を単に教員養成の実践的な必要に応じる教科(subject)ではなく、教育に関する高度な専門研究に従事する学問(discipline)として確立しようというデューイの教育学構想があった⁽¹⁰⁾。さらにその背後には、高度な専門科学としての教育学の確立を通して、教育学科をシカゴ大学のような総合大学のあらゆる専門領域を有機的に結びつける結節環にしようとい

う壮大な学問論・大学論がひかえていた⁽¹¹⁾。

3 シカゴ大学時代のデューイの教育学構想の背景

次に、シカゴ大学時代のデューイの教育学構想の背景について概観する。

小柳は、「デューイがシカゴ大学に着任した当時のアメリカでは、教育学を師範学校ではなく大学において講ずるところは数えるほどしかなく、いわんや大学院課程において教育学を独自の学科として位置づけるところは一つもなかった」⁽¹²⁾とデューイ着任当時のアメリカにおける教育学について述べている。

松村は、「教員養成がその中心を師範学校から教育大学に移ろうとしていた頃、デューイはシカゴ大学（Chicago Univ.）の哲学・教育学・心理学の責任者として、のちにはコロンビア大学（Columbia Univ.）の哲学の教授として、教育学研究及び教員養成に関して、大学はいかなる役割を果たすべきかに深い関心を示し、教育学に関する諸著作によって自己の見解を明らかにしたのであった。それゆえ、彼が主として論じたのは、実務訓練を中心とする師範学校や、その昇格したものである教育大学における教員養成をいかに為していくかということよりも、伝統的な学問研究の場である大学において教員養成をいかに行うかということを見すえてなされていることは、言うまでもないことであろう」とデューイの教員養成論について述べる⁽¹³⁾。

デューイは『学校と社会』において、師範学校及びカレッジの在り方について次のように疑問を呈している。

すなわち、教員養成のための学校—師範学校については、「師範学校が現在占めている地位は、変則的なものである。すなわち、ハイ・スクールとカレッジの中間に位置し、ハイ・スクールと同様の予備的な学力を要求していると共に、一定範囲のカレッジ相当の課業も取り込まれているのが師範学校である。しかし、師範学校は高等な学問的な教育内容からは切り離され、孤立しているのである。というのは、総じてこれまで師範学校の目的は何を教えるべきかということよりも、いかに教えるべきかということを訓練することにあったからである。」と述べる⁽¹⁴⁾。

他方カレッジについては、「この孤立していることの他の一半の理由は、何を教えるべきかについては学んでいるが、そのための教授の方法はほとんど軽蔑されている、といったような状況に見出される。カレッジは、子どもたちや青年期にある者たちの実態に親しく接触することから閉め出されている。カレッジの構成員である学生は、その大半の者が家庭から離れ

てしまっており、自分たちの子ども時代を忘れてしまっている。したがって、そのような学生がたまたま教師になろうとすると、相当量の教材を自由に使いこなす力はあるながらも、その教材が教えられる側の子どもたちの心にどのように関連させることができるかについての知識は、ほとんど持ち合わせていないのである。」⁽¹⁵⁾と述べる。

つまり、デューイは、師範学校の課題は高度な学問的な教育内容から切り離されて孤立していることであり、カレッジの課題は家庭から離れている学生は子ども時代を忘れているので、教材が教えられる側の子どもの心にどのように関連させるかについての知識を持っていないことであると捉えている。デューイはこの両者の課題について、「何を教えるべきかと、いかに教えるべきかについてのあいだには、このような分離があるので、師範学校とカレッジのいずれの側も、その隔離のために苦しんでいるのである」⁽¹⁶⁾と双方の問題点について整理し、この隔離をなくすべくシカゴ大学教育学科及びデューイ実験学校における教育実践を行うのである。

しかしながら、教育学を大学院課程の一学科に位置づけるという構想それ自体は、シカゴ大学初代学長のウィリアム・レイニー・ハーパー (William Rainey Harper) によるものであった。ハーパーは学長に就任した当初から、新生シカゴ大学を初等から高等に至る全教育制度の頂点に立つ研究・教育機関にしようという壮大な計画をもっており、大学の独立の単位としての教育学科の設置を計画し、そこで教育関係の高度な専門職の養成を目指すとともに、大学院課程の各専門学科の学生に対しても将来大学の教授職に就くための基礎教養として教育学の教育を施すことを予定した⁽¹⁷⁾。デューイの着任は、ハーパーにとっても格好の人材を得たものだった⁽¹⁸⁾といえる。デューイ着任の翌年(1895年)、シカゴ大学教育学科 (Department of Pedagogy) は哲学科の分科 (sub-department) として独立し、彼が主任成就を兼務した。その翌年、実験学校が開設され、いよいよ彼の教育学研究は本格化した⁽¹⁹⁾。

4 シカゴ大学時代のデューイの教育学構想

シカゴ時代のデューイの具体的な教育学構想について、デューイの1896年の論文「大学の教科としての教育学」⁽²⁰⁾を中心にして考察する。

デューイは、この論文で「教育の科学・技術を指導することに関しては明確な分業が必要である」と述べ、①一般教員の養成を主要な課題とする学校と②国の教育組織を支える指導者たちの教育をする学校という2つの学校の必要性を説いている。①の学校の職分は、新しい方針に沿って実験

を試みるということよりも、すでによく確立している方針に沿って、訓練を施すことでなければならないし、②の学校は、教育学上の発見や実験という教育活動にもっと直接専念すべきであるとデューイは論述している⁽²¹⁾。

そして、この②の教育活動は、大学・大学院課程として行わなければならないとデューイは述べる。なぜなら、大学は教育を組織化する自然な中核であり、その役割はきわめて多様な実際教育の中に現れている最善のものを収集してそれらを集約し、これを科学的に吟味して、具体的な使用に適う形に仕上げ、政府の強制というお墨付きによるのではなく、科学的証明という認可のもとに、これを公教育の組織に流していく役割を担っているからである。大学を中核に位置づけることによって、幼稚園から大学に至る全教育制度を正しく組織化してつりあいのとれたものとすることができるとデューイは論じている⁽²²⁾。

さらに、デューイは、大学の機能は、理論的にも実践的にも、過去の研究業績を集めて系統づけ、これを保存することだけではつくされない。そこには、過去の研究成果を、現在の必要に照らして吟味するという責任が残されており、新しい諸事実、新しい諸原理を発見して、積極的に貢献するという義務が課せられている。大学における研究の中心は、ますます、実験室や、セミナーの研究施設へと移っていると述べる。そして、この実験室や研究施設について、教育学科の場合には、理論的な研究の諸成果を実際の学習条件の中で吟味・公開することのできるような学校においてであると位置づけている⁽²³⁾。

さらにまた、デューイは、教育学の指導について、「大学であれ師範学校であれ、教室での理論が実際の学校活動と並行する程度に比例して効果的なものとなる。このようにしてのみ、学生は講義や教科書で示されたものの真意を理解することができるのであり、このようにしてのみ、教室で教えることが、あいまいで実行できないものではないという保証ともなりうるのである。理論と実践とは、常に結合していかなければならない」⁽²⁴⁾と述べる。

しかし、大学における教育学研究の授業場面については、「師範学校とは異なった指導と構成の仕方であるように、付設の実験室も両者間では異なっている。師範学校の実習校（実験室）は、将来の教師たちがその職業上の武器を実地に練習し、彼らに実際の授業活動ができるだけの用意を施すという意味での実習校であるのに対して、大学付設の実習学校という場合の『実習』（practice）とは、意味を拡大した言葉である。それは、個々の生徒に対するかかわりよりも、むしろ吟味・立証される諸原理と深い関

わりを持っている、厳密な意味において、実験室である」⁽²⁵⁾と位置づけている。

つまり、大学においても師範学校においても理論と実践とは結合していただかなければならないが、そのための「実習」の位置づけは両者において異なっているとデューイは主張している。

デューイが1897年にハーパー学長に宛てた文書「教育学科の授業組織に関する整備・拡充案」には、「指揮・監督の任に当たる優れた校長を招へいできるだけの手立てが、十分に整い次第（これは本質的にきわめて必要な事柄である）、われわれは、当大学において理論的な研究・学習を進めながら同時に〔当附属小学校をも〕補助する若干の人々を監督し、彼らに指導と批判をあたえていけるだけの人を確保するようにすべきである。このような措置は、補助者たちの奉仕に何らかの支払いをしなければならないどころか、却って彼らからわれわれは収益をえることができるのであるから、いろいろな意味において得策であろう」⁽²⁶⁾と述べられている。

これは、実験学校の校長の招へいに関する記述であるが、同時に、理論的な研究・学習を進めながら実験学校を補助する人々、つまり、アシスタントの意義や役割についても述べたものであると捉えることができる。ここでデューイは、実験学校を補助することは、アシスタントたちの学びとなるだけではなく、実験学校にとっても利益があると主張している。

シカゴ大学教育学科開設当初のデューイの教育学構想においては、大学における教育学研究・教育は、師範学校における教員養成とは異なるものであるという位置づけであった。デューイは着任当初、シカゴ大学教育学科において、師範学校における教員養成とは異なる教育学研究・教育を実践しようとしており、その実現のためにデューイ実験学校における教育実践を組織し、アシスタント制度を取り入れたのである。

デューイは実験学校開校後に著した、『学校と社会』において、「大学での教育学を教授するということは、ほとんどの場合、教育そのものの実際的な活動をとおしてというよりは、理論や講義により、書物に頼ることによって教えるということなのである」⁽²⁷⁾と大学における理論や講義、書物に頼る教育について批判的に捉えている。

そして「わたしたちは、当シカゴ大学において、さらにいっそう密接な理論と実践との結びつきを望んでいる。そのことは、大学がもっている資料や資源のいっさいを、附属の小学校でも意のままに使うことができるようにし、それによって価値ある教材および正しい方法を進展させるうえで寄与すると同時に、他方、当小学校では、当シカゴ大学の教育学の学生の

ための見返りとして、その学生の実験室になることが望まれているのである。その実験室で教育に関心を持つ学徒が、理論やアイディアが提示され、検証され、批判され、実行され、またそうすることにより、新しい真理が進展してくるのを、目のあたりにするのである。わたしたちは当小学校が、シカゴ大学との関係において、統一された教育の生きたモデルとなることを望むのである」⁽²⁸⁾と彼の実験学校とシカゴ大学における教育実践について述べている。この記述からも、デューイがシカゴ大学と実験学校における教育実践によって理論と実践を結びつけようとしていたこと、及び、デューイ実験学校が理論と実践とを結びつけるための実験室となることを期待していたことを読み取ることができる。

では、デューイはシカゴ大学教育学科において具体的にはどのような教育実践行っていたのであろうか。次に、シカゴ大学教育学科とデューイ実験学校の変遷について概観する。

5 シカゴ大学教育学科の変遷とデューイ実験学校

表1にシカゴ大学教育学科とデューイ実験学校の変遷の概略を示す。以下、『シカゴ大学年次記録』(ANNUAL REGISTER)の記述にしたがってその変遷を概観する。

1896年度版『シカゴ大学年次記録』(ANNUAL REGISTER, July, 1895-July, 1896)⁽²⁹⁾によれば、シカゴ大学教育学科は1895年から開設された。教育組織を支える指導者のための大学院も備えた教育機関の必要性をデューイは説き、この構想に基づいてシカゴ大学教育学科が経営された。そして、師範学校に付設の実験室とは異なる実験室、すなわち「個々の生徒に対するかかわりよりも、むしろ吟味・立証される諸原理と深いかかわりを持っている」「最も厳密な意味において、実験室」⁽³⁰⁾である学校が必要であるとの考えから「デューイ実験学校」が誕生した。

1898年度版と1899年度版の『シカゴ大学年次記録』の教育学科の記録には、「In the University Elementary School」という項目が設けられ、デューイ実験学校の教員の名前が掲載されている⁽³¹⁾。1900年度版の『シカゴ大学年次記録』においても、「Instructors in the University Elementary School」という項目が設けられており、デューイが構想したとおり、教育学科とデューイ実験学校が深く関わり合って教育実践が行われていた。

1901年度版の『シカゴ大学年次記録』⁽³²⁾、からは教育学科の名称が「Pedagogy」から「Education」へと変更になり⁽³³⁾、実験学校の教員

表1 シカゴ大学（教育学科・教育学部）とデューイ実験学校の変遷

年 月	シカゴ大学（教育学科・教育学部）	デューイ実験学校
1892	シカゴ大学開校	
1894. 7	デューイ、シカゴ大学に着任 哲学科 (Department of Philosophy) の主 任教授 (Head Professor) として	
1895 秋学期	教育学科開設 (Department of Pedagogy)	
1896. 1		実験学校開校、クララ・ミ ッチェル (Miss Clara I. Mitchell) を教師として
1901. 3	シカゴ学院 (The Chicago Institute of Pedagogy and Arts) がシカゴ大 学教育学科 (The University of Chicago School of Education) と してシカゴ大学に併合されることが決 定 (パーカーが学部長)。デューイは、 教育学科、サウスサイドアカデミー、 シカゴ手工学校を指導。	
1901. 7	デューイは大学附属中学校校長として の仕事を開始	
1901.10	正式に教育学部 (The School of Education) を開設。教育学科の名称 が「Pedagogy」から「Education」 へ変更。2つの附属小学校：大学附属 小学校 (The University Elementary School) , 大学附属実験学校 (The University Laboratory School) が 併存	
1902. 3	パーカー死去	
1902. 5	デューイが教育学部長 (director) に 就任 (シカゴ大学哲学科と教育学科の 主任教授、実験学校、シカゴ大学附属 中等学校、教育学部の教員養成部、附 属小学校を監督することになった)	
	教育学科は大学本体の学科としては廃 止	
1902.10		実験学校は教育学部の附属 小学校に吸収。アリス (デ ューイ夫人) が新しい附属 小学校の校長に就任
1904	デューイ辞職	

(小柳正司「シカゴ時代のジョン・デューイの書簡について (1) ～ (5)」、Annual Register, 1892-1904を参考にして筆者作成)

名は掲載されなくなる。同時に、シカゴ大学教育学部 (The School of Education) ⁽³⁴⁾ が開設される。これは、1901年にパーカーの運営するシカゴ学院がシカゴ大学に併合されたことによる。だが、この1901年の時点では教育学部と教育学科との関係は前者の下部組織としての後者ではなく、それぞれ独立した組織であり、デューイの分業の構想通り、教育学研究・教育と教員養成が乖離したままであった ⁽³⁵⁾。

さらに、1902年度版の『シカゴ大学年次記録』 ⁽³⁶⁾、には、教育学科は哲学科の「教育学科目群」 (Graduate Courses in Education) へと縮小する。これは、1902年3月にパーカーが急逝し、教育学科主任のデューイが教育学部長に就任することになったことによる。デューイが教育学部長に就任することに伴い、併存していた2つの教育学部門は、その大部分が教育学部に併合されることになった ⁽³⁷⁾。この教育学部には、教育学部の教員養成部 (The Professional Department)、シカゴ大学附属中学校 (The University Secondary School)、シカゴ手工学校 (The Chicago Manual Training School)、シカゴ大学附属実験学校 (The University Laboratory School)、シカゴ大学附属小学校 (The Elementary School) が含まれていた ⁽³⁸⁾。

教育学部長就任によって、教員養成と大学における教育学を別けて捉えていたデューイがその2元論的な考え方を克服しなければならない状況となった。

松村はこの状況について、「デューイは、教育学部長に就任することによって、教員養成と教育学研究・教育とを区別するという『分業』を、今度は組織的にも思想的にも統合するという課題に直面せざるをえなくなった」 ⁽³⁹⁾ と指摘している。そして、教育学部長就任後のデューイの論文や言明から「教員養成と教育学研究・教育との『分業』の発想から、自ら総合大学における教育学部の運営責任を負うことによって、両者を『統合』する課題を引き受けていった。教員養成と教育学研究・教育、さらに教員養成における<リベラ>な要素と<プロフェッショナル>な要素、また<何を教えるか>という教科の知識と<いかに教えるか>という教職に関する素養、そして教育学における<アカデミック>な側面と<テクニカル>な側面——こうした対立図式を、「実験室」的「探究」というデューイ思想独自の思考形式によって統合しようとしたのである」 ⁽⁴⁰⁾ と述べる。

では、シカゴ大学教育学科とデューイ実験学校との間で行われていたシカゴ大学学生のアシスタント活動は、この分業の統合というデューイの思想及びその思想形成にどのように寄与したのであろうか。次章では、アシ

スタント活動について検討を行う。

6 デューイ実験学校におけるシカゴ大学の学生アシスタントの役割と意義

まず、デューイ実験学校における学部学生・大学院生のアシスタントの役割について述べ、次にデューイがアシスタント制度を導入した意義について考察する。

デューイ実験学校のアシスタントには、1 研究の目的で述べた通り、有給の場合と無給の場合とがあり、シカゴ大学から授業料を援助されているような大学院生や、多くの学部学生がアシスタントとして活動していた。筆者は、デューイ実験学校開校時から1903年までの間に75名のアシスタントが活動していたこと、このアシスタントには実験学校における①「授業補助」、②「授業実施」の2通りの活動形態があり、①の「授業実施」のアシスタントはさらに研究のため、実習のため、奨学金のための3つに分類されることを明らかにした⁽⁴¹⁾。具体的には、①の「授業補助」はシカゴ大学の大学院及び学部における一部の授業の履修要件となっており、学生たちは大学の授業の一環として実験学校での授業観察と授業補助を行っていた。②の「授業実施」は、①と同様に一部の授業の履修要件となっていた場合と、優秀で教育経験がある学生が奨学金を得るための活動となっていた場合とがあった。1900年からは、実験学校でアシスタントを行うシカゴ大学の学生たちは、大学から指定された授業科目を受講することを義務付けられた。指定された授業科目⁽⁴²⁾の多くは実験学校の教員及び大学助言者の担当であった。

先に述べたとおりデューイは、論文「大学の教科としての教育学」において、教育学の指導について「教室での理論が実際の学校活動と平行する程度に比例して効果的なもの」となり、「学生は講義や教科書で示されたものの真意を理解することができる」し「教室で教えることが、あいまいで実行できないものではないという保証になりうる」と主張し、この主張から「理論と実践とは、常に結合していかなければならない」と結論づけている。『学校と社会』においては「教育そのものの実際的な活動を通して」教育学を教授することの意義を説いている。

実際に、シカゴ大学の学部学生・大学院生たちは、教育学上の実験室であるとデューイが位置づけていた実験学校におけるアシスタント活動を通して、教育そのものの実際的な活動を行い、大学で学んだ理論と実験学校における学校生活とを平行することによって、大学の講義や教科書で示されたものの真意を理解し、大学の教室で教えられることは、曖昧なもので

も実行不可能なものではないことを学ぶ機会を得ていた。つまり、アシスタント活動によって大学での理論と実験学校における実践との統合が実現していた。

では、デューイがシカゴ大学着任当初に持っていた大学における教育学研究・教育と師範学校との「分業」の思想へのアシスタント活動の影響はいかなるものであったのだろうか。

先に、デューイが、師範学校とカレッジの間には「何を教えるべきか」と「いかに教えるべきか」の分離があり、両者はその隔離に苦しんでいると述べていることを指摘した。大学での理論と実験学校における実践との統合を目指すアシスタント活動は、この隔離を打破する活動、つまり、「何を教えるべきか」と「いかに教えるべきか」を統合する役割を担った活動にほかならない。

さらに、『学校と社会』において、デューイが「大学院の学生は、自分たちの調査研究や研究方法をたずさえて、わたしたちの実験学校へやってきて、いろいろなアイディアや問題を提示してくれている」と述べている通り、実験学校は最新の教育学研究の場であったことはもちろんであるが、同時にその最新の研究の成果を「いかに教えるべきか」についても探究し、理論と実践とを統合する場であったともいえる。

デューイが、1896年のシカゴ大学着任当初の論文⁽⁴³⁾で示した「分業」の発想を組織的にも思想的にも統合するという課題に直面せざるをえない状況となったのは、教育学科と教育学部が併合して教育学部長となった1902年のことである。しかしながら、この分業の発想は、シカゴ大学教育学科及びデューイ実験学校における教育実践を通してデューイによって再検討され続けており、その統合という思想形成に多大な影響を与えていたと考えられる。統合後の教育学部の学生がデューイ実験学校においてアシスタント活動を実施して否かについては未調査であるので、教育学部長就任以降のデューイの教育学構想については別稿で論ずることとする。

7 デューイ実験学校でアシスタントを行ったシカゴ大学学生の進路

デューイ実験学校においてアシスタントを行っていたシカゴ大学の学部学生・大学院生のうち、本稿ではロウ・ロバート・ケープル⁽⁴⁴⁾ (Row, Robert Keable) を採り上げて、その進路についての調査結果⁽⁴⁵⁾を示し、デューイ実験学校におけるシカゴ大学教育学科の学生によるアシスタント活動の意義について考察する。

彼は、1901-1903年の春学期までシカゴ大学大学院で学んでいる。博

士論文執筆許可者の一人であり、執筆許可の推薦者はデューイである⁽⁴⁶⁾。また、1909年に出版した著書『手工芸と手工業の教育上の意味』(The Educational Meaning of Manual Arts and Industries)の冒頭で「この著書をインスパイアしてくれたデューイ教授へ」と記述していることから、在学中にデューイから多大な影響を受けたと考えられる。同時にデューイ実験学校におけるアシスタント活動を行っていたことから、同校における教育実践からも多くを学んでいたことを推測できる。同著書の分析は別稿で行うこととするが、この著書には、シカゴ大学教育学科及びデューイ実験学校におけるアシスタント活動から学んだ成果が記されていると考えられる。

彼は、1903-1906年までシカゴ大学の学外教育部門の講師として働き、1906年から出版社に編集長として勤務している。アメリカ教育協会(National Educational Association)、教育出版社協会(Educational Publishers' Association)のメンバーでもあった。1909年の著書以外にも、1906年 Studies in English、1907年 Essential Studies in English, vols. I and II、1917年 Work and Play with Language、1923年 Triune Writing-Spellersなどの著書がある。1901年の大学院入学以前にも数冊の著書がある⁽⁴⁷⁾。

デューイは、シカゴ大学教育学科着任当初の論文「教育学上の実験」において「教育学の主たる目的は教員の養成ではない。むしろ、すでにながりの教育に関する経験を持ち、彼らの専門科目の意味のある諸原理やごく最近の教育の動向をより徹底的に知りたいと望んでいる教員達を受け入れている。以前の教育長や師範学校の教員が、それゆえに教育学の大学院生の大部分を占めている」⁽⁴⁸⁾と教育学の構想を説明している。

ケーブルの事例は、デューイが構想したとおり、シカゴ大学教育学科には高い専門性を備えた学生が入学しており、同学科で学ぶこと及び実験学校におけるアシスタント活動を通して更にその専門性を深め、教育に関する専門的知識を活かして広く社会で活躍する人材を育成していたことを示唆している。

本稿の2 デューイによる実験学校とシカゴ大学教育学科の構想において、小柳は、デューイによる実験学校とシカゴ大学の構想の背景には、教育学を高度な専門研究に従事する学問として確立しようというデューイの教育学構想があったと指摘していることを示した。教育学を高度な専門研究に従事する学問として確立するというデューイの教育学構想の背景には、教職を専門職として確立するという構想があった。

デューイが構想した教育学を実現するためには、理論と実践とを統合するための実験室、すなわち、デューイ実験学校の存在が必要不可欠であり、この実験室における実践を通して学生たちは講義や教科書で示されたことの真意を理解する。実験学校におけるアシスタント活動は、理論と実践とを統合するための大きな役割を果たしていたことから、教職を専門職として確立するというデューイの構想を実現するためにも重要な役割を担っていたといえる。

8 研究のまとめ

本稿では、シカゴ大学教育学科におけるデューイの教育学構想の観点から、デューイが実験学校にアシスタント制度を導入した意図及びその意義について検討することを目的として、デューイの諸著作、シカゴ大学の年次記録などの検討を行った。

検討の結果、シカゴ大学教育学科においてデューイは、教育学を高度な学問研究に従事する学問として確立し、教職を専門職として位置づけることを構想していたことから、同教育学科は、師範学校及びカレッジの課題を克服する必要があったこと、デューイは、この課題克服の方策の1つとなることを意図してシカゴ大学学生のアシスタント活動を導入したことが明らかになった。

デューイが示しているカレッジ及び師範学校における課題とは、「何を教えるか」と「いかにして教えるか」の分離であった。すなわち、デューイによれば、カレッジの学生は教材を自由に使いこなす力は備えているが、彼らは子ども時代を忘れてしまっているため、その教材が教えられる子どもの心にどのように関連させることができるのかについての知識は備えていないという。デューイは、シカゴ大学教育学科の学生が実験学校においてアシスタント活動を行うことによって、子ども時代を忘れていた学生たちにとって子どもの学びの実際を目の当たりにする機会となり、教材が教えられる子どもの心を学ぶ活動となることを意図していた。

つまり、シカゴ大学学生のアシスタント活動におけるアシスタント制度の導入には、大学での学問研究を現実の学校教育場面で実感を持って理解すること、そして、学生たちに子どもたちの心の有り様を実感させることによって、「何を教えるか」と「いかにして教えるか」の分離を克服し、理論と実践とが統合される機会となるという意義があった。さらに本研究では、一人の事例ではあるが、デューイ実験学校においてアシスタント活動を行い、シカゴ大学教育学科修了後に教職専門職として活躍した卒業生

の存在を確認することもできた。さらにまた、シカゴ大学学生たちが奨学金を得る機会にもなっていた。

このアシスタント制度の導入は、シカゴ大学の学生にとってのみではなく、デューイ実験学校にとっても、大学生がアシスタント活動を行うことによって一人ひとりの子どもたちの教育を充実させることや、最新の研究の成果を子どもたちの教育に取り入れることができるという利点があった⁽⁴⁹⁾。

本稿では、1902年の教育学部との統合以前に焦点をあてて検討を行ったが、教育学部と統合した後にデューイの「分業」の考え方がどのように変化したのかについても重要な研究課題である。今後の研究テーマとしたい。

<註>

- (1) 伊藤敦美「デューイ実験学校における教職の意義及び教員の役割」『日本デューイ学会紀要』第46号、2005年、10-20頁。
- (2) K. C. Mayhew & A.C. Edwards, *The Dewey School, The Laboratory Schools of the University of Chicago 1896-1893*, New York, Atherton Press, 1936, p.373.
- (3) J. Dewey, "The Three Years of the University Elementary School" (1899), *MW*, Vol.1, p.58. ジョン・デューイ著・市村尚久訳『学校と社会』講談社学術文庫、1998年、241頁参照。
- (4) 小柳正司「シカゴ大学実験学校の背景にあったデューイの教育学構想—師範教育から教育科学の確立へ—」『鹿児島大学紀要』第50巻、1999年、211頁。
- (5) J.Dewey, "A Pedagogical Experiment" (1896), *EW*, Vol.1, p.244. デューイ著・大浦猛編、遠藤明彦、佐藤三郎訳「教育上の実験」『実験学校の理論』明治図書、1977年、p.149参照。
- (6) J.Dewey, "The Need for Laboratory School" (1896), *EW*, Vol.5, p.433. デューイ著・大浦猛編、遠藤明彦、佐藤三郎訳「実験学校の必要性」『実験学校の理論』明治図書、1977年、p.145参照。
- (7) *Ibid.*, p.433. 同訳書、145-146頁。
- (8) *Ibid.*, p.433. 同訳書、146頁。
- (9) *Ibid.*, p.434. 同訳書、146-147頁。
- (10) 小柳正司「シカゴ大学実験学校の創設の背景にあったデューイの教育学構想—師範教育から教育科学の確立へ—」、212頁。
- (11) 同論文、212頁。
- (12) 同論文、217頁。松浦は「アメリカの大学史において教育学関係の恒常的な教授職がおかれたのは、1873年のアイオワ州立大学や1879年のミシガン大学が最初と言われる。その後、20世紀の初頭に書けての数十年間に、各地の大学における教育学部門は急速に拡充され、教育学科・教育学部の設置があいつぐようになった」と述べている。松浦良充「第4章第2節 教育学研究・教育と教員養成」『日本の戦後教育とデューイ』世界思想社、1998年、159頁。

- (13) 松村将「デューイは教員養成をいかに考えていたか」『日本デューイ学会紀要』第13号、1972年、95頁。
- (14) J.Dewey, "The School and Society" (1899), *MW*, Vol.1, p.43. ジョン・デューイ著・市村尚久訳『学校と社会』講談社学術文庫、1998年、131頁。
- (15) *Ibid.*, p.43. 同訳書、131-132頁。
- (16) *Ibid.*, p.43. 同訳書、132頁。
- (17) 小柳正司「シカゴ大学実験学校の創設の背景にあったデューイの教育学構想―師範教育から教育科学の確立へ―」、217頁。
- (18) 松浦良充「第4章第2節 教育学研究・教育と教員養成論」『日本の戦後教育とデューイ』、158頁。
- (19) 同書、160頁。
- (20) J. Dewey, "Pedagogy as a University Discipline" (1896), *EW*, Vol.5, pp.281-289. デューイ著・大浦猛編、遠藤明彦、佐藤三郎訳「大学における教育学の教育」『実験学校の理論』明治図書、1977年、127-137頁。
- (21) *Ibid.*, pp.281-282. 同論文、127-128頁。
- (22) *Ibid.*, pp.282-284. 同論文、129-130頁。
- (23) *Ibid.*, p.288. 同論文、135頁。
- (24) *Ibid.*, p.288. 同論文、135頁。
- (25) *Ibid.*, p.288. 同論文、135-136頁
- (26) J. Dewey, "Plan for Organization of Work in a Fully Equipped Department of Pedagogy" (1897), *EW*, Vol.5, p.447. デューイ著・大浦猛編、遠藤明彦、佐藤三郎訳「教育学科の授業組織に関する整備・拡充案」『実験学校の理論』明治図書、1977年、143頁。
- (27) J. Dewey, "The School and Society" (1899), *EW*, p.55. ジョン・デューイ著・市村尚久訳『学校と社会』、154頁。
- (28) *Ibid.*, p.56. 同訳書、154-155頁。
- (29) *Annual Register* July, 1895-July, 1896, The University of Chicago, The University of Chicago Press, 1896, pp. 52-53. 小柳正司「シカゴ大学実験学校とデューイの教育学構想」日本デューイ学会第48回研究大会発表資料、3-4頁。
- (30) J. Dewey, "Pedagogy as a University Discipline" (1896), p.288. デューイ著・大浦猛編、遠藤明彦、佐藤三郎訳「大学における教育学の教育」『実験学校の理論』、136頁。
- (31) *Annual Register* July, 1897-July, 1898, 1898, p.176. *Annual Register* July, 1898-July, 1899, 1899, p.184. 1895-1896年度版、1896.7-1897年度版には実験学校の教員に関する記述はない。*Annual Register* July, 1895-July, 1896, 1896, p.52. *Annual Register* July, 1896-July, 1897, 1897, p.172.
- (32) *Annual Register* July, 1900-July, 1901, 1901, p.179.
- (33) 小柳は「Pedagogyはもともと学校教師のための教授法 (didactics) という意味が強かったのに対して、educationで表現される教育学は教育そのものを一つの社会的な制度や機能として研究する実証科学という意味が強い」と説明されている。小柳正司「シカゴ大学実験学校の創設の背景にあったデューイの教育学構想―師範教育から教育科学の確立へ―」、221頁。
- (34) この教育学部は、The Professional Department 及びThe Elementary Departmentから成っていた。*Annual Register* July, 1900-July, 1901, 1901,

p.107.

- (35) 松浦良充「第4章第2節 教育学研究・教育と教員養成論」『日本の戦後教育とデューイ』、162頁。
- (36) *Annual Register* July, 1901–July, 1902, 1902, p.192.
- (37) 松浦良充「第4章第2節 教育学研究・教育と教員養成論」『日本の戦後教育とデューイ』、162頁。
- (38) *Annual Register* July, 1901–July, 1902, 1902, pp.121-122.
- (39) 松浦良充「第4章第2節 教育学研究・教育と教員養成論」『日本の戦後教育とデューイ』、162–163頁。
- (40) 同書、165頁。
- (41) 伊藤敦美「デューイ実験学校と連携したシカゴ大学教育学科のカリキュラム—学部学生・大学院生のアシスタント活動に焦点をあてて—」日本カリキュラム学会第19回大会発表要旨集録p.56及び発表配付資料。
- (42) デューイとランヤンによる「小学校教育：一般原理」(Elementary Education: General Principles)、キャンプによる「小学校教育：科学」(Elementary Education: Science、ヤングによる「実験教育学」(Experimental Pedagogy)など。*Annual Register* July, 1899–July, 1900, p.160.
- (43) J. Dewey, “Pedagogy as a University Discipline” (1896), pp.281-289. デューイ著・大浦猛編、遠藤明彦、佐藤三郎訳「大学における教育学の教育」『実験学校の理論』、127–137頁。
- (44) 1858年8月28日生まれ。1902–1903年度に教育学の分野で奨学金を受けていた。*Annual Register* July, 1901–July, 1902, p.187.
- (45) 筆者は、2006年、2007年、2008年にシカゴ大学図書館スペシャルコレクション・リサーチセンター (Special Collections Research Center, The University of Chicago Library) 及びハロルドワシントン図書館 (Harold Washington Library) においてシカゴ大学のアシスタントに関わる調査を実施した。
- (46) “Record of Work”, the University of Chicago Office of Register. 2006年に実施した調査の際に、シカゴ大学学籍係の協力によってアシスタントを行っていた学生の学業成績証明書を開示していただいた。
- (47) *The Book of Chicagoans*, Chicago, A. N. Maquis & Company, 1917, p.586. *The Book of Chicagoans*, Chicago, A. N. Maquis & Company, 1926, p.752.
- (48) J. Dewey, “A Pedagogical Experiment” (1896), p.244. デューイ著・大浦猛編、遠藤明彦、佐藤三郎訳「教育上の実験」『実験学校の理論』、149頁参照。
- (49) 小柳によれば、デューイ実験学校は財政難が続いていたことから、実験学校の側からは、財政難による教員不足対策の側面もあったと考えられる。小柳正司「デューイ・スクールの真実—シカゴ大学実験学校はどのような学校だったのか—」『鹿兒島大学教育学部研究紀要 教育科学編』第50巻、1999年、185–209頁、及び、小柳正司「シカゴ大学時代のジョン・デューイの書簡について (3) —実験学校の開始から『学校と社会』の出版まで：1896～1900年」『鹿兒島大学教育学部研究紀要 教育科学編』第53巻、2002年、203–233頁において指摘されている。

<付記>

本研究は、平成19～20年度科学研究費補助金（若手研究（B））「デューイ実験学校

における学部学生・大学院生のアシスタント活動による教職専門職教育」課題研究番号
19730500による研究成果の一部である。